



2050年の
心中ネズミ

タケオとウェイン、フォンイーはソリッドカーボンの棒切れを握りしめ、素振りを繰り返してレミング狩りに備えている。2050年の東京には、みすぼらしくて憐れで悪臭漂うレミングがうようようろうろとして目障りでしかたない。レミングは忌み嫌われ、本音では誰もが連中を一掃したいと思っている。だから、職にあぶれ、やることもなく、力のあり余る若者の間ではレミング狩りが流行っていた。

「何匹潰せる？ 今日」

アメリカ人を父に持つウェインが英語なまりの日本語で訊く。若者たちは、レミングを殺すことを潰すと呼んでいる。レミングを殺すときは、棒切れやハンマー、時にはコンクリートブロックを力いっぱい振り下ろして、ぐしゃっと頭を潰す。若者たちは、その瞬間に、肉が破れ骨が砕け脳が潰れ歯が割れる、その感触が自分の腕の筋肉をぶるぶると震わせることにより、オーガズムに似た快感を得るのだ。レミングたちは残酷極まりないやり方で殺されるのだが、東京の人々はレミングを嫌悪しているので見て見ぬふりをするのみ。

「今日は雨が降りそう。だから、ゴミ共の居場所、分かりやすいよ。どうせ橋の下とかで雨宿りしてる」

フォンイーの両親は台湾人で、やはりなまった日本語を喋る。2050年の東京には、当たり前のように移民が住んでいる。

タケオはふふ、と鼻で笑って応え、薄闇に向かって棒切れを振り下ろす。空気の裂ける音がして、タケオはレミングの頭が砕ける感触を思い出し、小便の後みたいに背筋をくすぐる快感に身を震わす。

三人はバイクにまたがり街へ出た、ひやりふわり、冷たく柔らかい夜風がさらりと肌をなで心地良い。唸り声のような喧騒がビルの中に間に渦を巻き、発光する東京を巻き込みながら四散八散して、疾走する三人の体に降り注いで爆竹のように弾けている。夜の街は、肉付きの良い鬱病持ちの風俗嬢のように、冷たく柔らかく刺々しく暗く、心地良い。

レミングが居住する貧民街にやって来た三人はバイクを降りて区営駐車場に停める。下手に屋外に置いておけば、あっという間にバラバラにされてパーツを盗まれるだろう。夜の貧民街にやって来る人間などレミング狩りの若者くらいで駐車場に客はない、だから区営駐車場の警備員と仲良くなっていれば缶ビール一本くらいの賄賂で好き放題止められる。

貧民街にはゴミが溢れ、掃除も行き届かず、通りには糞尿が広がり、ほんの僅かな風にも悪臭が貼りついてねっとりと鼻腔を舐めてくるので、その不快感に思わず吐きそうになる。こればかりは何度来ても馴れることができそうにない。風に吹かれたのか、バランスを失ったのか、ベンチから落ちたアルミ缶が嫌に湿っぽい音を出して転がり、中から正体の知れぬ緑茶色の液体が漏れてアスファルトの裂け目をびちゃびちゃと濡らしていく。

ぽつぽつ、雨が降り始める。三人は古いゴミ溜めを再利用したかのような街を抜け、フォンイー

一の言うとおりの橋の下へとレミング狩りに向かった。暗闇、その中でもフォンイーはよく目が見えているので、先陣を切って索敵を行う。月の白を反転させたかのように黒い、精密機器で穿った穴のようにつるりときれいに円い、フォンイーの目。闇から闇へ、上下左右、奥手前、視線をなめらかに動かして、「いた！」と快哉一叫、標的目がけて指を差す。その声と同時にタケオとウェインが飛び出していく、履き慣らしたスニーカーで地面を打ち鳴らし、棒切れを振りかざし、雄叫びを上げて、嘔き出る昂揚で顔を赤くして、闇へ闇へ走り走る。

「Gotchaaaaaaa!!!!」

ウェインが不意を突かれて動けずにいたレミングの頭に重烈な一撃を叩き落す。肉破れ骨砕け脳潰れ歯割れてぐしゃぐしゃと鳴り血が嘔いて一匹目のレミングは地面に崩れ落ちる。筋肉を固く収縮させて身動きひとつできず不随意の涙を垂れ流し、崩れかけるゼリーのように震え、どろりどろりと血を流す様は嗜虐性をかき立てて、ウェインは興奮で息を荒くしながら、ひっ、ひっ、と笑いを漏らしレミングの頭に二度三度と棒切れを振り下ろした。

闇へ闇へ、タケオはもう一匹のレミングを追って走り走る。老いさらばえているくせに思ったより逃げ足の速いレミングで、頭への狙い定まらず、タケオは代わりにアキレス腱目がけて振り上げた棒切れを叩きつけてやった。大の大人の怯えた悲鳴、ひどく悲痛だが、ひどく滑稽でもある。レミングは地面に転がり、目に涙を溜め震えながらタケオを見上げている。こうして何度も向き合っているのに、死の恐怖というのは至極想像しがたい。どのレミングもこんなふうにも目に涙を溜めて震えながら絶望によって日常では見ることの出来ないような皺を顔に浮かび上がらせる。きっと言葉にできないほど恐ろしいのだろう、だが言葉に出来ないことについて興味を持つのは時間の無駄でしかない。それに何より、この場で生死の決定権を握っているのはタケオのほうなのだ。

「お前、何年生まれだ？」

老いたレミングにタケオは訊ねる。老人がレミングなのかどうかを確認するだめだ。こんな所にいる時点でおそらくはそうなのだろうが、憎しみには確信がある方が快感も増す。レミングは震えながら、1986年、と自分が生まれた年を答える。

「ありがとさん！」

タケオはその答えを聞くと同時にソリッドカーボンの棒切れでレミングの鼻面をもぎ取るように薙いだ。軟骨がひしゃげて肉が破れ壊れた蛇口のように血を噴いた。うっ、うっ、と涙声で呻いてレミングは鼻を押さえてうずくまる。

老人はレミングだった。1980年代と1990年代に生まれた人間たちは皆レミングと呼ばれ憎まれている。なぜならレミングは闘わずに黙従することを選んだ世代だからだ。高齢化社会による老人支配によって自分たちと後続世代が苦しむことを理解できる立場にありながら、ただ駄犬のようにだらしなく腹を見せて従うことを選んだ世代を誰もが軽蔑し憎んでいた。ビクビクしながら世の中の流れにまかせて事なかれ主義に生きようとした彼らを、後続世代たちは迷信で集団自殺するネズミとされているレミングに喩えた。2040年に老人支配に耐えかねた二十代から三十代の若者たちが革命を起こし、レミングたちは政治経済の場から追放され、ゴミ溜めのような貧民街に押し込まれることになった。当時はまだ子どもで革命に参加できなかったタケオ

たちのような2030年代生まれの若者たちは、その革命の尻馬で騒ぐかのようにレミング狩りに精を出すのだ。

タケオは生々しい軽蔑と嫌悪を剥き出しにしてレミングを見下ろす。闇の微かに動いている表情を見ながら、ズタ袋に臆病者の顔がくっついていのようにしか思えなくなってくる。この不潔なズタ袋を引き裂いて、ぼろぼろになるまで打ちつけて、跡形もなく消してしまえ、タケオは激情にも似た嫌悪を込めて棒切れを握りしめ、渾身の一撃を顔面に加えた。くしゃくしゃと音がして肉が裂け骨が砕け、次の一撃で眼球が破れ眼窩から液体が飛び出し顔はもはや顔と呼べる形をしていない。前のめりになったレミングの後頭部への一撃、骨が裂開して脳が飛び出してくる。タケオは何度も棒切れを振り下ろす、まるでこうすることで自分が革命に参加し、その偉大な仕事の総仕上げを担当していると信じているかのように、昂揚し、荒く熱い息を吐いて、たった一枚の紙切れでしかない死を何重にも折り重ねてそれを高く積み上げようとするかのように。

結局その日、三人が殺したレミングは一人一匹ずつの三匹だった。雨が降っている、区営駐車場に戻った三人はそこで雨宿りをする。そこへ三人と同年くらいの警備員がやって来て話しかけてきた。

「今日は何匹潰したの？」

振り返った三人を警備員はにこやかに見つめながら、三本の缶ビールを差し出している。ちょうど喉が渴いていた、三人は血まみれの手でそれを受け取り、笑みを返した以外はひと言も発せずそのビールをぐいぐいと飲む。三人は警備員の名前を知らない、警備員も敢えて名乗ろうとはしない。警備員は別にろくに給料も良くないし未来のある仕事でもない、そしてタケオたち三人はみんな職にあぶれている。革命後の社会は未だ混乱して、別に明るい未来が約束されているわけでもない。でも、累々としたレミングの死体を見ていると、少なくともくだらない過去に足を引っ張られることはなさそうだと信じることができた。ビールを飲み干した三人は、実は賄賂にビールを貰いすぎて余ってるんだと言う警備員と握手を交わし、次はどんな賄賂が良いのか教えてくれよと屈託のない笑顔で肩を抱き合う。